

## わが国における糖尿病診療と教育活動の実態(第5報) )-2012年度全国アンケート調査より-

著者名(日)	鈴木 和枝, 藤田 弘美, 橋場 直彦, 本吉 光隆, 池田 義雄
雑誌名	紀要
巻	VOLN7
ページ	36
発行年	2015-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1345/00003351/">http://id.nii.ac.jp/1345/00003351/</a>

わが国における糖尿病診療と教育活動の実態（第5報）—2012年度全国アンケート調査より—

鈴木和枝<sup>1)</sup> 藤田弘美<sup>1)</sup> 橋場直彦<sup>1)</sup> 本吉光隆<sup>2)</sup> 池田義雄<sup>3)</sup>

東京聖栄大学<sup>1)</sup> 上総記念病院<sup>2)</sup> タニタ体重科学研究所<sup>3)</sup>

(第57回日本糖尿病学会年次学術集会：2013年5月23日、社会医学 医療経済学 2 口頭発表)

要旨

【目的】わが国における糖尿病診療の実態を把握するべく、1972年、1982年、1992年及び2002年の過去4回アンケート調査を実施し、その成績を本学会誌に報告してきた。以来再び10年を経た時点で、前回と同様のアンケート調査を行った。本報告では、2012年の調査成績を過去4回の成績と比較して、その推移を観察した。【方法】アンケート調査は郵送法によった。対象は前回の調査と同様に本学会総会抄録集より、全国190の大学病院内科教室、1191の一般病院、649の診療所・開業医家を抽出し、これを糖尿病に関心が高い医療機関の代表とした。回収率は43.7%であった。

【成績】経口ブドウ糖負荷試験は、1982年以降75g法が主流で、2012年には全施設の99%で実施されていた。その判定基準は、日本糖尿病学会によるものが各年度ともに大半を占めた。血糖自己測定(SMBG)の導入率は今回も99%と高率で、診療報酬の改更により、SMBG実施の平均患者数は1982年の6.9名から2012年では255.3名(のべ患者数:2型糖尿病657名、1型糖尿病621名)と著増した。同様に、診療報酬が増額した持続皮下インスリン注入療法(CSII)は全施設の37.5%で導入されていた。なお、持続血糖測定の導入率は全施設で21.8%、尿糖自己測定の導入率は17.5%、糖尿病透析予防管理料の算定率は68.5%であった。過去40年間、糖尿病専門外来と糖尿病教室の実施率は、各年度ともに全施設の過半数を上回った。教育入院施設の割合は、1972年の9%から今回は61%と著明な増加であった。施設別では今回も、大学病院及び一般病院よりは診療所・開業医家の方が、糖尿病専門外来と糖尿病教室の実施率は低く、教育入院施設の割合も同様であった。本学会専門医、研修指導医、認定教育施設並びに糖尿病療養指導士の普及率は、全施設で10年ごとに増加したが、施設別の普及率はやはり診療所・開業医家が低率であった。日本糖尿病協会所属の友の会を有する施設数は、1972年83施設、今回468施設と過去40年間に著しい増加であった。施設別の加入率では、診療所・開業医家が74%と最も高く、日本糖尿病協会療養指導医の登録率も62%と高かった。診療所・開業医家では、糖尿病診療や教育活動の充実を図るための対策として、前回は医療連携の導入による模索が示唆されたが、その導入率は今回35.1%と低く、現状においては日本糖尿病協会活動による効果を期待する動向と捉えられた。【結論】1972年～2012年の間に5回実施したアンケート調査成績では、糖尿病の診療面での進展がみられたが、診療所・開業医家における問題点を解消する手段として、日本糖尿病協会活動の今後更なる進展が望まれる。